

勉強会を活用した組織成長モデル ～2年目の成果と課題～

SCSK株式会社

金融システム事業部門

金融システム第五事業本部 証券システム第一部

伊藤修司

作成日：2018/3/19

更新日：2018/5/21

contents

はじめに

1年目のおさらい

1. 活動のご紹介
2. 活動の成果と課題

今年度の活動

1. 活動実績
2. 運営方針の見直し
3. 具体例① 若手育成の場として活用
4. 具体例② プロジェクトで明示的に活用
5. 具体例③ 活動の理念とゴール
6. 活動結果まとめ 1年目との比較
7. 今後に向けて

この事例は、2017年6月のSSシンポジウム（宮崎）で発表した内容の続編です。2年目を迎えて、活動内容がどう変化し、組織にどんな変化をもたらしたのかについてご報告させていただきます。

2017年6月 SSシンポジウム（宮崎）の発表内容

http://sea.jp/ss2017/accepted_papers.html#2-9

事例報告：

勉強会を活用した組織成長モデル～機能期のチームが継続的に成長するために～
伊藤修司，山口真，豊田圭一郎（SCSK）

要旨：

基幹系システムを保守・運用する組織やチームは、そのシステムが稼働し続ける限り、もしくは契約が続く限り、一定の経験を有するメンバーを中核に据えた体制を維持する必要がある。

今回の事例報告では、機能期の段階に突入した組織が、メンバーを入れ替えずに更に成長していくための手法として、「参加型勉強会」を適用した事例を紹介する。

1年目のおさらい

活動のご紹介

ランチ形式でワーク主体の「参加型勉強会」
ふりかえりを活用して勉強会と他の活動を連動させることで学びの
サイクルを構築。

＜特徴1＞
グループワーク中心で
座学よりもアウトプット重視。

合言葉は
この勉強会に「正解はありません」

＜特徴2＞
ふりかえりやレポートを活用して
他の活動との橋渡しを実施。

各活動の成果をプロジェクトで
実践しやすいサイクルを設計。



ランチ開催

定時後だと参加できないメン
バーも積極的に参加



こまめにふりかえり

ふりかえりが次のプロジェクトや
勉強会につながる



記録と情報共有

参加者の想いや考えを組織の
資産として記録し、いつでも引
き出せるように

1年目の主な成果・課題と2年目に向けた対策です。

成果

現場のコミュニケーション活性化

実際の業務でチームの枠組みを超えた会話や連携が増えた。
⇒横断的な活動の第一歩。

積極的な発言を引き出す

全体会議でコンフリクトを恐れない積極的な発言が増えた。
⇒発言者の多様性が新たな可能性を生む。

新しい知識やスキルへの意欲

旬のテーマや手法を体験することで、外に目が向くようになってきた。
⇒自ら外部セミナーに参加するメンバーが増えた。

課題

成果が見えにくい

コミュニケーションが活性化したのは感じるが、それがどのように人材育成や現場に影響をあたえているのかが見えない。

一過性の想いで終わる

勉強会直後はいろいろな想いやアイデアが浮かぶが、仕事に戻ると忘れてしまう。

毎回同じ意見で終わる

いつも同じような意見で終わる、年間をとおして進化していない

対策

成果をもっと実感できるように、勉強会の成果を直接的にプロジェクトや若手育成とつなげる。

中長期的な視点・観点で考えて活動できる仕掛けを検討する。

今年度の活動

1. 活動実績

2017年度の勉強会開催実績

回	時期	テーマ	キーワード	参加者
1	2017/9/1 (金) 11:30～13:00	投信システムと積立 NISA	若手教育の場 大規模案件の品質向上	36名
2	2017/9/29 (金) 11:30～13:00	株式システムとオンライン機能	若手教育の場 大規模案件の品質向上	38名
3	2018/2/28 (水) 11:30～13:00	証券システムのインフラ	インフラの強み 週末メンテナンス、運用監視 インフラに興味を	35名
4	2018/3/14 (水) 10:00～11:30	証券決済の仕組みと 決済期間短縮 (T+2)	機構・クリアリング・日証金 証券決済におけるモノとカネの 動きを追う	30名
				参加率 約67%

実施回数は減少したが、参加率が約6%向上

2. 運営方針の変更

前年度の課題を受けて、活動を開始するにあたり運営を見直しました。

① 勉強会を 若手育成の場として活用

勉強会運営委員を若手育成の場と位置付けました。同時に、3つのOKを約束しました。

約束 1

意識が高なくてOK

決して意識の高い活動ではありません。

約束 2

前面に出なくてもOK

発表だけが活躍の場ではありません。運営する側も毎回学んでいます。

約束 3

想いがあればOK

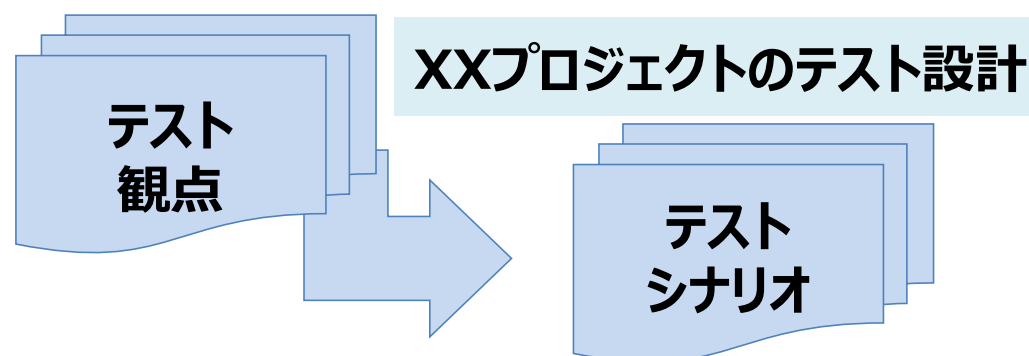
各自の想いを語ってください。みんなで勉強会のテーマに昇華させましょう。

若手が勉強会運営に携わるように

② 勉強会のアウトプットを プロジェクトで明示的に活用

勉強会のアウトプットを明示的にプロジェクトのインプットとしました。

ワークの問い：XXプロジェクトで考慮すべきテスト観点を考えよう！



プロジェクトの品質向上に寄与

3. 具体例① 若手育成の場として活用

勉強会を若手育成の場として活用

STEP1：あらかじめ活動の目的とゴールを明確にする

回	テーマ	目的	ゴール
1	投信システムと積立NISA	①若手の育成：この活動を通して新人・若手がシステムおよび案件対応について学ぶ	①新人・若手が受注～約定までのデータフローを理解して双方の違いを説明できるようになる。
2	株式システムと証券取引所接続	②企画・プレゼンスkill向上：勉強会の企画から実践まで経験することで通常業務ではなかなか身につかないスキルを磨く ③中堅・ベテラン層に気づきを与える	②新人・若手が案件の概要を理解して、担当サブシステムの設計のみならず、テスト工程の打鍵・検証者として機能する ③勉強会参加者が、プロジェクトで気を付けるべき観点のヒントを得る

STEP2：中堅、若手の混合チームで役割分担

役割	ミッション	投信チーム	株式チーム
新人・若手	資料作成・発表	A・B・Cさん	X・Y・Zさん
講師	事前教育担当	aさん	bさん
アドバイザー	全体的な監修	有識者Y	有識者T

若手は主役として活躍

中堅層は教えることで学ぶ

ベテラン層は新たな気づきを

勉強会の企画・準備・運営・実施を通してそれぞれが学ぶ

3. 具体例① 若手育成の成果

今回の活動は、投信に関する基礎知識を得る機会となりました。システムの全体像を理解しつつも、細部まで詳しく説明してくれる先輩の姿をみて、スペシャリストになりたいと思うようになった。また、レビューを通して、進捗を確認し、認識を合わせて、成果物をブラッシュアップしていくことの重要性を学んだ。

各サブシステムの中身をより深く学び、いち早く自分のものにしていきます！！

今回の企画を通して新たな気づきがありました。

- ・業務知識を身に付けることで、業務に入りやすくなる
- ・RFPを読むことで、案件の全体像がわかる
- ・スケジュールやタスク管理の難しさ、限られた時間内でいかに成果を出すか

今回の成果と反省を活かして、3年後は新しい制度改正の主担当になります！！

自チーム以外の視点からシステムを見つめ直すと、色々な新しい発見がありました。この発見は、システムを設計する上でも役立つものであると感じます。

システム全体を意識して設計することの重要性を改めて感じた！！

漠然としか理解していなかった内容を学び直すよいきっかけとなりました。**オンラインシステム全体がどのように絡んでいるのかを理解できたのが収穫！！**

資料もポイントがわかりやすく、後で見返したくなる内容でした。

今回の取り組みを通して、これまで理解が曖昧になっていた直結の仕組みや特徴について理解を深めることができた。

システムのみならずサービスとしての利便性、優位性から考えるアプローチは今後も活用していきたい！！

自身の担当しているサブシステムを改めて知る機会となり、担当システムと業務の知識を深めることが出来た。

今回得た知識をベースにして、今後はより能動的に業務に取り組んでいきたい！！

若手の前向きな発言、前向きなプレゼンに成果を実感

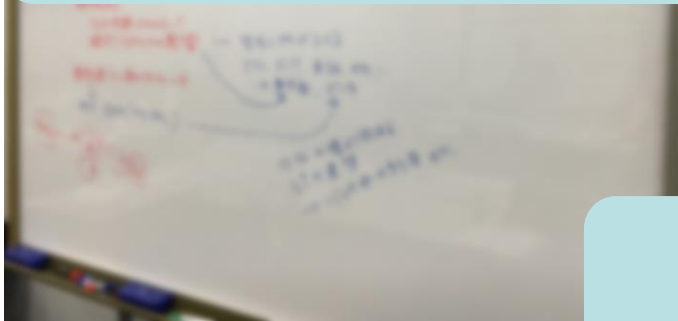
4. 具体例② プロジェクトで明示的に活用

勉強会グループワークの様子

STEP1：知識と経験＋プレゼン内容＋想像力を駆使して議論

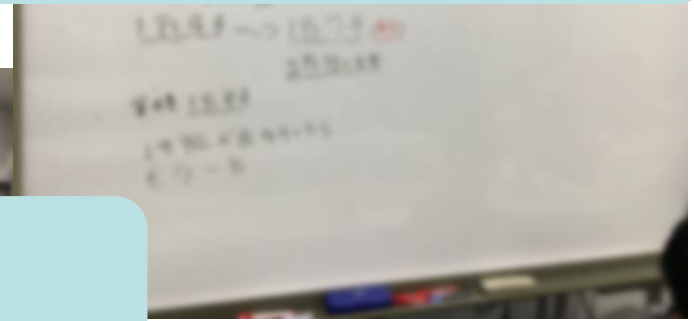
Aグループ

見落としがちな非機能要件を意識しよう



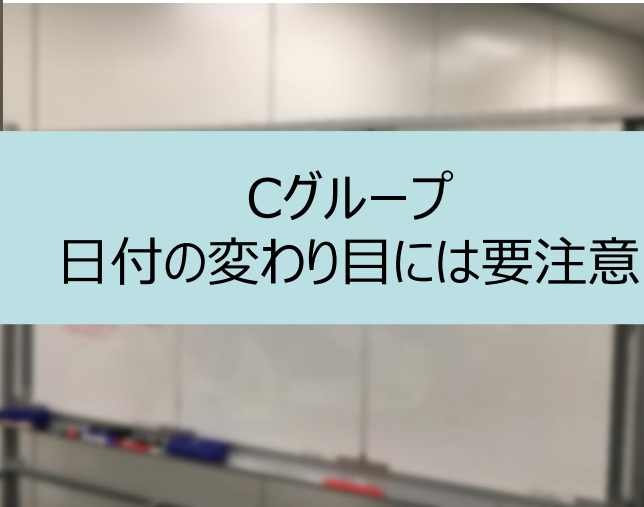
Bグループ

相場の急変を意識した限界性能テスト



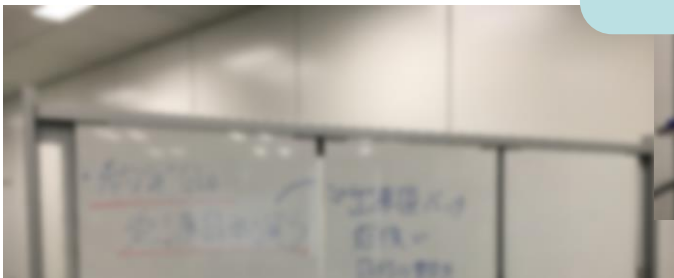
Cグループ

日付の変わり目には要注意



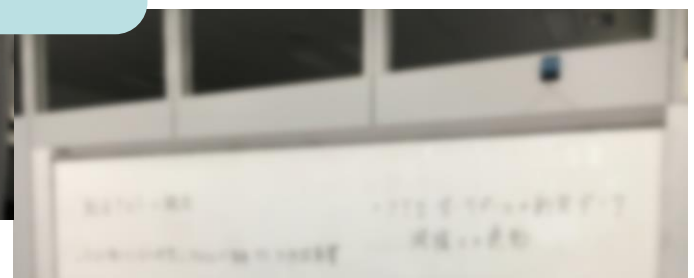
Dグループ

締めバッチ前後の動きこそ意識せよ



Eグループ

外部連携を意識したプロセスの起動停止

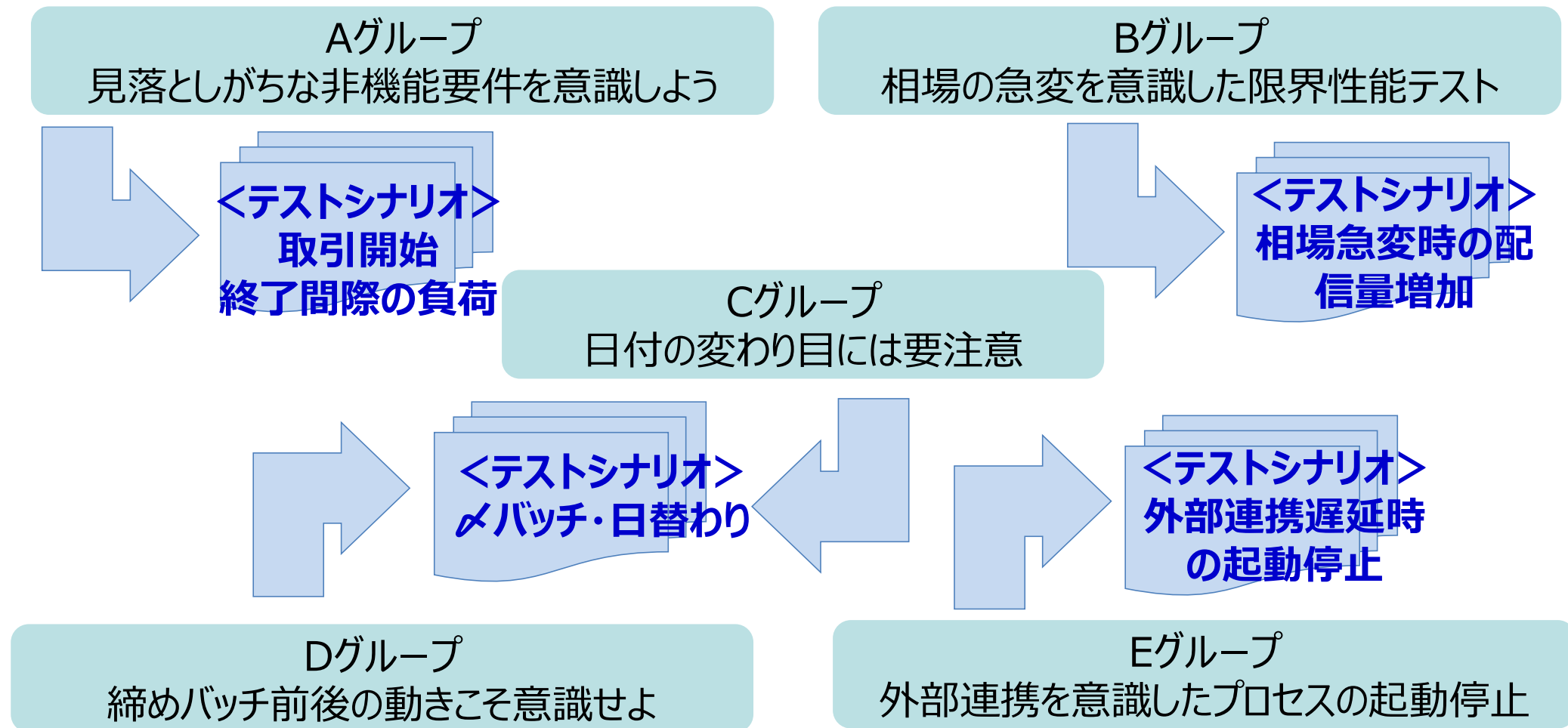


実際のテストをイメージした具体的な意見交換

4. 具体例② プロジェクトで明示的に活用

勉強会グループワークの様子

STEP2：ワークの観点をテスト設計のインプットに活用



勉強会で得た気づきをテストシナリオとしてつなげる

4. 具体例② プロジェクトの品質向上に貢献

勉強会のグループワークでテスト観点を洗い出し プロジェクトのテスト設計に活用

作りこみ観点の成果

勉強会の成果物を元にして、プロジェクトのテストケース抽出に活用
→約30の検証観点を抽出

発見観点の成果

ユーザテスト以降の不具合大幅削減
→適用プロジェクトについて
規模あたり不具合前年度比約20%減

その他の成果

テストだけでなく上流工程に活用しようという声が出てきた
→具体的な成果は来期へ

プロジェクトの品質向上を目の当たりにして成果を実感

5. 具体例③ 活動の理念とゴール

<理念>

- ・自分で考え自分の意見を持つこと
- ・勉強会を通して、「新たな関係性」と「新たなアイデア」を参加者同士が現場で協働する状況を生み出すきっかけ

STEP1

テーマと問い
の設定

現場の内外から
テーマを設定

STEP2

参加者の多
様性

集客の工夫で
多様性を確保

STEP3

場の設計と
演出

全員参加の場
を演出

STEP4

気づき
行動

主体的な行
を引き出す

<ゴール>

- ・自分の意見を自分の言葉で表現できるようになる
- ・参加者全員が深い気づきや発想の転換の機会を得て理想の組織となるべく改善活動に挑戦すること

<近年の成果>

- ・チーム内勉強会の増加
- ・若手の成長と若手リーダーの活躍
- ・試行錯誤しながら毎年よりよい組織形態を模索
- ・中長期を意識した発言や課題形成の増加

積極的な発言や行動が確実に増えてきた！

6. 活動結果まとめ 1年目との比較

2年間の活動結果を比較します

2016

1年目

2017

2年目

7回

実施回数

4回

インフォーマルな会は増加

約60%

参加率

約66%

延べ137名が参加

品質目標未達

品質

品質目標達

計画達成

規模と収益

計画達成

AI、ブロックチェーン等
の新しいテーマに着目

活動のゴールとの関連

若手の成長を加速
理想の組織に向けて前進

7. 今後に向けて

もう一段階レベルアップするために掲げる課題です

課題	内容
変化と継続	2年続けてみて、継続は力なりを実感する一方で、組織の成長と共に形を変えていく必要性を感じる。 ⇒同じテーマや進め方ではいずれ限界がくる。今後もこの活動を進化するための工夫は欠かせない。
人材育成活動との連携を強化	若手の育成の場として大きな可能性を実感。中堅層、ベテラン層にも新たな気づきを与えることができる。 ⇒若手の成長こそ組織の源泉、勉強会を活用して中堅・ベテラン層が若手の育成に前向きに取り組む文化を醸成したい。
コミュニケーションの量と質の可視化	勉強会を通して、コミュニケーションの量と質は確実に良くなっていると感じるが、なかなかそれを示せない。 ⇒ここに組織が継続的に成長していくヒントがあるはず、様々な手法を活用して可視化する方法を模索したい。



ご清聴ありがとうございました。

SCSK株式会社

金融システム事業部門

金融システム第五事業本部 証券システム第一部

伊藤 修司 (Shuuji.Itou@scsk.jp)

山口 真 (Makoto.Yamaguchi@scsk.jp)

豊田 圭一郎 (Keiichirou.Toyoda@scsk.jp)

〒135-0061 東京都江東区豊洲3-2-24 豊洲フォレシア

- 本書の著作権はSCSK株式会社に帰属します。無断転写および本書に記述されたアイデア等の無断流用を禁止します。
- 掲載されている社名や製品名は、それぞれ各社の商標または登録商標です。